

口語詩句 2024.2月 総評 龍 秀美

春のかぜ
ひよこのまわりで
大はしゃぎ

桜咲 千葉県

——優しく、柔らかく、暖かいもののオンパレード。こういうものも良い。

白菜を買いに行ったきり鎖国

まちりこ 埼玉県

——日常を象徴する白菜。それを買いに行ったら突然帰れなくなる。比喻ではない現実に行っている現在の世界。

じだんだを
すすきのように受け流す
母の ほっきょくぐまのまなざし

さいう 愛知県

——ありそうにない取り合わせのすすきと北極熊がリアル感をかえって引き立てる。母というものの落ちつきと悠揚さもほっきょくぐまに似ている。

謝れるかもアネモネの中でなら

吉沢 美香 宮城県

——アイマイとアネモネは似ている。ネバネバする語感も。こういう感覚の中でなら謝れる。

胞子舞う穴の底にはママがいる

玻璃 愛媛県

——生殖機能のひとつである胞子が舞い散っている。しかも密かに穴の底である。こういう場所に母が潜んでいるのは不思議ではない。

世界史の一問先に広がった
戦場をまだ僕は知らない

うたた 岡山県

——戦争というものは世界史の教科書や試験でしか知らない。すぐ次の問いの中では現実になるかも知れないのだ。

おとうとが靴をはくとき
やわらかくきいろくかたむいた
ランドセル

うたた 岡山県

——幼い弟という生き物に一体化している黄色いランドセル。その柔らかい動きが愛しい弟そのもの。

完熟をすぎた果実のくるしさの
かつてひとつの花だったこと

羽水繭 大阪府

——かつて完璧な美しさと清純さを持った花だった。その記憶と現在の落差の苦しさは増すばかりなのだ。

いまできた宇宙のように
髪の束
ほどけるうちに
滅びる星も

藤井 柊太 神奈川県

——女性の髪のみずみずしい美しさ。それが形になって結われる刹那にも、どこかで生き物としての宇宙は崩壊している。雄大なスケールを持った歌。

ルンバどこいくのそっちは冬の海

斎藤よひら 京都府

——まるで意志を持っているかのように動き回るけなげな器械。作者自身ともどこか重なるような切なさ。